
ハジメマシテ ダイキライ です

restart

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハジメマシテ ダイキライ です

【Zコード】

Z36100

【作者名】

restart

【あらすじ】
あるとき、捻くれ者の少年と、素直でおかしな少女が出会いました。

だれか、俺の話を聞いてくれないだろうか。

いやいや、無理しなくてもイヤつてんなら別にいい。

俺はアンタを惹きつけるような話し上手でもなんでもないからね。立ち止まってくれてもそれは無駄な時間かもしれないんだ。

笑っちゃうよな。くだらない話なんだ。

たつた、そう。

たつた三分間だけの、話だ。

「

」

そして、彼女は笑つて手を差し出した。

それはどこからどうみても可愛い女の子。俺の好みとこうわけでもないけど。そう、普通の少女だ。

きっと誰からでも好かれるのである、可愛い女の子。

その笑顔からは拒絶など知らないのだろうか、俺を信じて疑わないような、そんな笑顔。

ああ、君と俺は初対面だろうね。

だって俺は君みたいな可愛い子は初めて見たんだ。うん、そうに決まってるよ。

その間、僅か三秒。

「ああ、そう。うん。ハジメマシテ。」

手を握ることもせず、俺は言葉だけを発した。両手は後ろに回した。

君の手なんて握つてあげないよって。

君は少しだけ不思議そうな顔をして手を引っ込める。そりゃあそうだ。握つてもられないのに手なんて出しても意味ないぞ。

俺は愛想笑いを浮かべる。

現在、十秒。

「君つって、変わった子だね。」

次に口から飛び出したのはそれだ。
ああ、俺のほうが結構変わってる。

君はその顔を少しだけ歪めた。人差し指を唇にあてて、なにかを考えているようだった。

考えるのは俺の方かもしれないけど。

まだまだ、たつた十五秒。

「そりか？普通だと思つけどな。」

君は指を離すと、また笑顔でそう言った。

いやいや、結構かなり変わってる、かもしない。

不思議な子。そう、不思議な子。

いきなり初対面の人に『変わってる』なんて言われたら、少しは気を悪くしそうなもんだけどな。

そんな様子、まるでない。

これで、やつと三十秒。

「俺は、君みたいな子は初めてだよ。うん、すぐ変わってる。君、将来すごい変人になるかもね。」

君はそれでも笑った。

さもおかしそうに笑って、俺の事を見た。
なんだ？なにか、おかしいことでも言つたかな。俺は。
俺はいつでも真面目なのに。

まだ終わらない、四十秒。

「それはそれで、おもしろそうだね。私が変人になつたら、どんな風になるんだろうね。」

そうだなあ、君が変人になつたら、いま以上にずっと笑つてゐるかもしれないね。それはそれで変人だ。

ああ、君は俺が君のことを馬鹿にしてるつて気づかないのか？
本当にすごくなつてゐるかもしれない。

君は俺のことを見て、まだまだずっとにこにこ笑つてゐる。
俺が次の言葉を発するのを待つてゐるみたいだつた。

一分。

「そつだね。きつと、誰も見れないくらい、とても無様だろつた。

我ながらなかなかにヒドいことを言つてゐる。しづがない、俺は
そういう奴だ。

君はそれでも笑う。

こんなこと言つても、笑ってくれるのって、きっと君へらいだよね。
そんな君が、俺は『…………』だよ。

「ひどい。初対面でそんなこと、普通言わないよ?」
『ひどい』なんて言つても、笑顔のままだ。

やっと半分、一分三十秒。

「ひどいのは君の存在だよ。君はその無垢な瞳で、どれだけの人を傷つけてきたんだい?」

俺、最低。

わかってる。だってしうがないよね。俺は俺だ。
どれだけ捻くれてるのかってはなしかな?

君の顔が少しだけ、少しだけ醜く歪むのがわかる。
「無垢だよね。君つて。」

続けた俺の言葉。

まるで、全てがわかつているような台詞だ。
わかるわけがないけど。

この話、あと一分を切った。

「正直に言つよ。俺、君みたいな人がダイキライだよ。ここにここ笑
つてさ、それだけで何とかなるとも思つてんの?」

君の顔がもつと歪む。

可愛い顔が、その形を崩し、不安そうな顔で俺を見つめる。
不思議な感じだ、俺がこれを歪めると思つと。
とても、不思議な感じだ。

あと、五十秒。

「どうして、そんなこと言つたの？」

決まつてゐるだろ。

変わらない声色で、君は言つた。

それは、もしかしたらやつとのことでしぼりだした言葉だったのか
もしれない。

俺は君みたいな人が『

』なんだ。

『なのに、何の理由がある？

とても、長い三十秒。

「俺が君の事、ダイキライだからだよ。」

君は、おかしいよ。

どうして、俺のこと、そんな目で見るの？

君の顔は、すっかり元の調子に戻る。
さつきまで醜く歪んでたというのに、今の一言で、すっかり戻つてしまつた。

「ダイキライ。そつか。私は君のこと、嫌いじゃないよ。」

にこにこと笑う。底無しの笑顔。

気持ち悪い。

そう、真面目に、思つた。

「ふーん。本当に、変人だね。」

俺は、笑うことができなくなつてた。

おかしい。

俺は、君なんて『　』だと、言ったのに。
どうして、君は、『　』と言わない？

そして、その五秒。

「だってね、私、思うよ。『ダイキライ』と『ダイスキ』は紙一重。君が、私のことを気にかけてくれるだけでも、嬉しいな。

じゃあ私、用事あるから。また一緒に話せたら、嬉しいな。

やつぱり、どこかへ行ってしまった君。

あとの一秒。

俺は、君の言葉を考えるだけで終わってしまった。

じゃあ、『ハジメマシテ』で、『ダイキライ』だったり。

また君と出会つと。
俺は君の事。

『ダイスキ』なのかもしれない。

このたつた三分間の話は、これで終わりだけれど。
俺はこの三分を、本当にたくさん考えた。

君を『ダイスキ』と思える日なんて来るとは思えない。

でも、また君と会えたら、俺はきっと、

『ああ、ダイキライな奴がいる』

って、言つて。

きっと、すっげえいい顔で、

笑っちゃうんだろうな。

笑つてしまつんだろうな。

俺は、君に負けてしまったんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3610o/>

ハジメマシテ ダイキライ です

2010年10月17日15時41分発行